

# 幼稚園教諭・保育教諭に求められる資質能力の方向性 — 保育者として習得することが求められる課題について —

## Direction of qualifications required for kindergarten and childcare teachers -About the issues that must be learned as a childcare worker-

松尾 裕美

Hiromi Matsuo

### I. はじめに

平成27年「中教審答申」によると、「これからの時代の教員には、これまで教員として不易とされてきた資質・能力に加え、自ら学ぶ姿勢を持ち、時代の変化や自らのキャリアステージに応じて求められる資質・能力を生涯にわたって高めていくことのできる力や情報を適切に収集選択し活用する能力、知識を有機的に結び付け構造化する力が求められる。また、アクティブ・ラーニングの視点からの指導改善、特別な支援を必要とする子どもへの対応や保護者支援等の新たな課題に対応できる力量も高めることが必要<sup>1)</sup>」と方向性を示されている。幼稚園教諭に対しての資質・能力についての研究の在り方について、平成26～29年度に文部科学省の委託を受け神長<sup>2)</sup>らがまとめ報告されている。その内容を見ていくと、1、「幼稚園・保育教諭のための研修ガイド—質の高い教育・保育の実現のために」2、「養成から現職への学びの連続性を踏まえて新規採用教員研修」3、「実践の中核を担うミドルリーダーの育成を目指して」4、「幼稚園経営の一翼を担うミドルリーダーの育成を目指して」5、「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイド」を報告している。

本編は、「保育」に関わることは、人と人の関りによって営まれていくことを最重要視し、保育者の育ちに焦点を当て保育者養成校での学生指導、及び幼児教育の現場の声を橋渡ししながら幼稚園教諭、保育教諭に必要な資質について考えていく。

「保育者の育ち」に大きく関わっていると思われる

人間関係を考えてみると、①子どもとの関り②施設長（園長）との関り③先輩保育者④同僚保育者⑤保護者との関りが挙げられる。保育者がそれぞれの関りある人間関係を信頼ある人間関係として築かれていなければ、保育は成り立たない。一人の人間としてのかかわり方、育ちあう思いを持って、お互いに保育者として成長していくと考える。

### II. 幼稚園教諭に求められる専門性

文部科学省による「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために<sup>3)</sup>」の報告に、幼稚園教員の資質向上の意義について、遊びを通した総合的な指導を行う重要性が挙げられており、幼児教育において中核的な役割を担う保育者の重要性は柔軟性やたくましさ为基础として向上させていくことが重要と示されている。

幼稚園教諭に求められる資質には、いわゆる「不易流行」の部分が多く含み、幼児を理解し、総合的な指導をするために必要な資質は「不易」として位置づけられ、原点に立って向上させていくべきものとし、現代の幼稚園を取り巻く環境に適応する「流行」の部分を備えながらの資質向上に意義があると読み取れる。いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れ、新味を求めて変化を重ねていく流行性こそが不易の本質であると考えられる。

幼稚園教諭の専門性には、保育者としての資質が備わり、幼児理解・総合的に指導する力が必要とされる。総合的な指導を具体的に保育として組み立てていく創

造する力と実践力も求められるであろう。保育者間の協同性により学びが磨かれていくことを考えると、あらゆることへの興味関心を持ち、聞く力も必要になってくると思われる。また、配慮が必要な子どもや保護者対応、小学校や保育所、専門機関への連携を行い地域社会の中にある幼稚園として関係性を構築していく力も備わっていてほしいと考える。また、どの子ども同じ子どもとして扱うことが出来、人権についても正確な理解が求められる。それらの行動を子どもの手本となるようにきちんとした指導ができるように保育者としても求められるであろう。保育者が「保育を行う」ことは、日々の変化（子ども・環境・人間関係等）に臨機応変に判断できる一人の人間として幼稚園教諭に求められる専門性として挙げられると考えられる。

### Ⅲ. 幼稚園教諭の養成段階に求められること

幼稚園教諭には多様な専門性が求められていることを踏まえると、幼稚園教諭の養成段階から現職段階へ一貫した理念に基づいて資質・能力の向上を図り長期的な視野をもって養成にあたることが求められる。

文部科学省保育教諭養成課程研究会は平成26年度より「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅠ、研修ガイドⅡ」と策定を行い28年度には「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅢ—実践の中核を担うミドルリーダー養成」を作成している。図1に示す通り、幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程の考え方がある。養成段階では、幼稚園教育についての基礎的な知識や理解、技能を習得することが課題であるが、学生たちの学びを考えると「実習は大変な部分が多いが、子ども達の中にいることに喜びを感じ、やっぱり子どもが好きなことを再認識できる機会となった」との振り返りを考えると、実際の子どもの関係から、子どもに対する優しさ、愛おしさを含む関心や感情を持つことの大切さへと課題が見えてくる。一個人ではなく、保育者として心揺さぶられる体験、経験が保育者としての成長へと繋がると思われる。

養成段階として、①子どもと関わる仕事に就きたいと思う夢を持つことが出来るように。②乳幼児の教育・保育の基本と実践を学ぶ。③実習を通して実践力を身に付ける。④周囲に支えられて教諭になる。という目標を養成校として担っているのである。

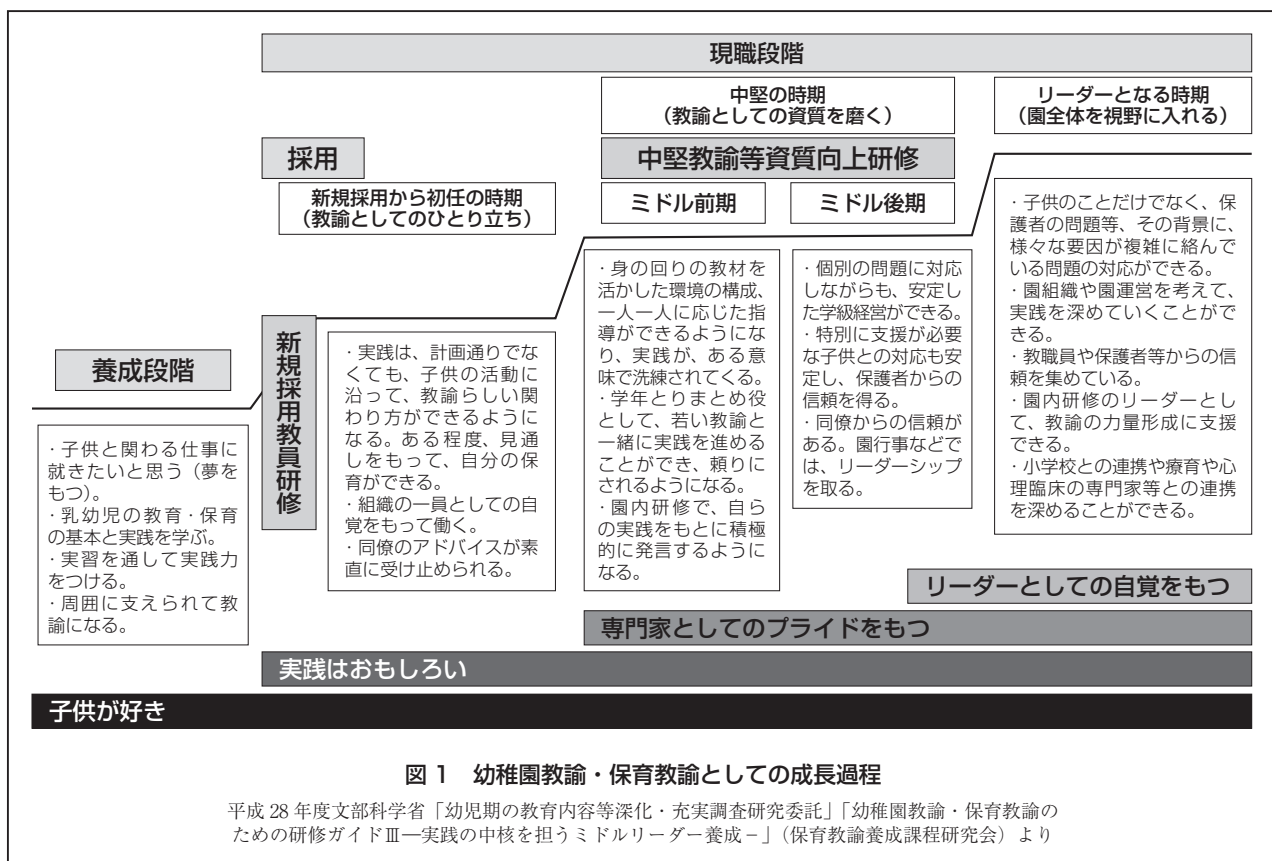


図1 幼稚園教諭・保育教諭としての成長過程

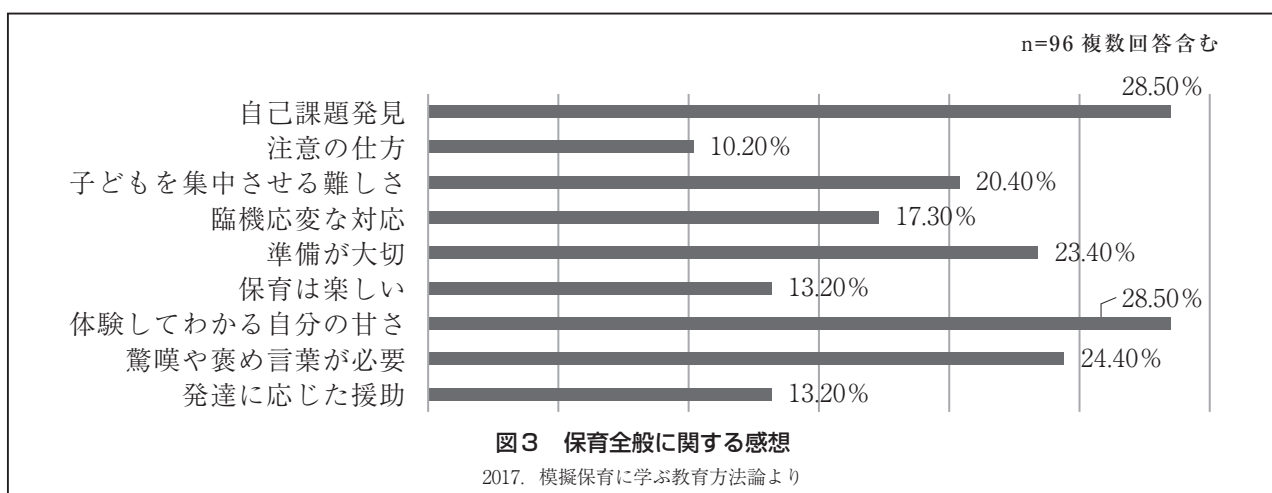
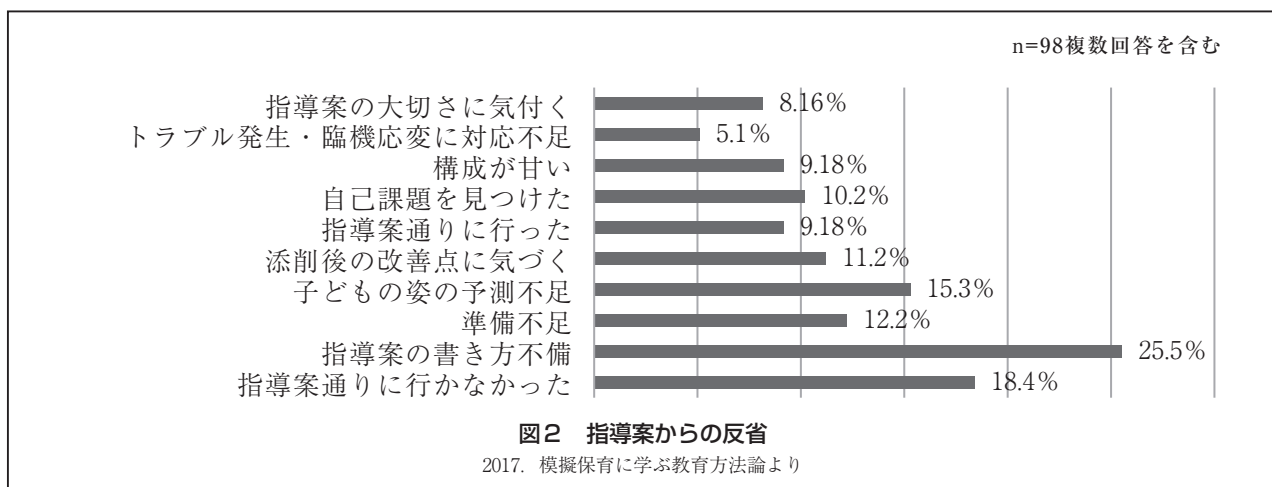
平成28年度文部科学省「幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託」 「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドⅢ—実践の中核を担うミドルリーダー養成—」 (保育教諭養成課程研究会) より

#### Ⅳ. 実習生の責任実習の実践力の課題

養成校として前述の③実習を通して実践力を身につけることについて、どれほどの責任実習が成長へとつながっているかを考えてみる。過去7年間教育実習指導に携わり多くの実習日誌から拾い集めると、何かしらの「制作遊び」を選ぶ学生が多く、決められた時間内に「動くおもちゃ」「季節感のある制作」などの完成を目指す制作活動が多くを占めている。次にあげられるのが「体を動かす遊び」「ルールのある活動」など時間的にある程度保育者がイニシアチブを取ることが出来る活動が多く選ばれていた。大学の授業で作成した「パネルシアター」「エプロンシアター」など教材研究から実践までを考え、実習に繋げていった学生も多くいた。

責任実習において、それらを選んだ理由には「動くおもちゃや完成したもので次の活動に繋げていくこと

が出来る」また、「作ったもので楽しく遊んでほしい」「友達と協力することをねらいに入れているから」などが挙げられていた。設定保育を終えた感想を自身の反省点と保育者からの指導を見ていく。指導案を立てた段階から反省までの一連のPDCAをまとめた松尾(2017)<sup>4)</sup>の研究では、図2のような結果となっている。それによると、子どもへの援助の仕方、子ども一人ひとりに応じた言葉かけの仕方、指導案の書きかたの段階から自身の不備を反省点として挙げている学生が多い。「設定保育を進めなくてはという気持ちがあり、時間や個別対応に気が回らなかった」と後述する学生も多かった。保育全般に関する感想としては、図3のような結果となっている。保育者が行っているのを見て学ぶことも重要な学習であるが、実際に子どもの前での「説明」においては、保育者の説明を子どもになったつもりで聞いていると、説明の仕方、言語、保育者の目線、教材の示し方などの保育者ならではの進め方があることに気づいた点が学生の実践力の向上



につながっていた。事前準備段階で、保育者が事前に準備しておいた方が良い準備が多くあることにも気づいたようである。ピアノ、指遊びの練習不足、絵本の熟読不足等により1つの失敗から時間配分の計画ミスに繋がった例もあった。自己課題の発見につながっている。

園長、主任、担当教諭から責任実習を終えて多くのアドバイスが日誌に書かれていた。キーワードは「適切な言葉かけ」「全体を見る」「個人差の配慮」などが挙げられていた。早くできた子どもの対応、時間がかかる子どもへの対応など適切な関わり方へのアドバイスがあった。具体的な指導が次の責任実習へとつながっていると思われる。多くの指導者が「いきなり保育に入るのではなく導入時の工夫や子どもの興味関心を保育者に向けてからの説明」が指摘事項として記述されていた。

援助に対するアドバイスでは、「分かりやすく大きな声での説明」「活動を認める声掛け」、例えば、「よくできてるね。かわいいものが描けたね。いいアイデアだね etc」次に、「与えるだけではなく、色を自由に子どもに選ばせる」「テープカッターなどの使い方の説明を丁寧にする」これは、力のかけ方の違いで、きれいに切れたり、切れなかったりするものの体験を含んだ活動の体験の計画が挙げられており指導されていた。

実習期間中に幼児一人ひとりの内面を理解し、信頼関係を築いていくことは容易ではないが、活動の場面に応じた適切な指導を行う力を備えておく必要がある。それにより、教育を展開する力となり、具体的な保育に固執することなく、人間として、保育者として豊かな人間性が基礎となり、使命感や情熱が生まれてくると考えられる。実際に教育実習に行き、保育への情熱が高まり、より一層保育技術を習得しようと努力する学生と、反対に自分が保育者として向いていないと、職業の適性が違う事に気がつく学生もいることも事実である。

津守(1987)は『子どもの世界をどう見るか』の中で、保育直後の生活の重要性を二つ指摘している。一つは「保育者の体感に捉えられた記憶を改めて記憶し直す」ということである。このことは後に立ち戻る記憶と記録の原点とするためであると述べている。二つ目には保育直後の生活において保育者自身が自らのテーマを

見出すからだという。また、保育中は行為の水準で子どもの理解を行っているが、保育後に思い起こすことの中で、より意識化が進み省察により意味が与えられるとも述べている。また教育実践に於ける行為と思考の関係にある循環性の点からも省察の重要性が指摘されている。<sup>5)</sup> また関口(2003)は保育者が「子どもから心を離さず、集中して無心で保育する」ことや「その日の出来事について開放的な気持ちで向き合う」ことが明日の保育への続く作業として津森の省察に対する考えを基に保育者論を展開している。<sup>6)</sup> 実習生が指導案を作成し、実際に保育をさせていただく場合、保育中は様々な焦りや戸惑い、時間の配分などを考えながら、なんとか必死に指導案という台本通りに流れを持っていこうとする。学生一人ひとりの考えるその日一日の部分保育、全日保育のみを全うしようとする事により、見落としてしまう子どもの気持ちが保育者との大きな違いとなると思われる。保育実践力における課題として、2つ挙げられる。1つは指導計画をきちんと作成する力を身に付けておくこと。子どもの実態に即しての活動内容を計画する力を持つておくことである。子どもの興味関心と保育者の願いやねらいを重ね合わせ、なおかつその季節、行事、発達にあった活動を取り入れての指導案作成が挙げられる。2つ目は子どもに対しての適切な言葉かけやふさわしい言葉使いなど子どもたちに語り掛けるたくさんの言葉を持ち、場面に応じて声掛けが出来る力を身に付けることである。これは保育を展開してく上で力となると思われる。言葉による否定ではなく、プラスの言葉を用いて表現を変え、子どもに適切に援助を行う力に繋がるからと考えるからである。保育を行いながら子どもを観察し、「今援助が必要か、いやここは見守っておこう」と判断しながら子どもの思いと保育者のねらいを重ねたふさわしい関わり方は、その保育を展開していく方向へと繋がるからである。2つの課題を学生自身が身に付け、回数を重ねていくことにより、実習での設定保育への自信へと繋げていけるように指導が必要に思われる。自信のある指導案により、様々な対応、子どもの予想できる姿への対応は、語彙力を使い、適切な言葉掛けにより保育を展開することに役に立つと思われる。すなわち、PDCAを確かなものとし、保育者に近づくスキル考える。

## V. 保育現場が求める保育者像

保育技術とは別に、教育実習訪問指導の際に保育現場の管理職から聞こえてくるものは、「技術的なことは出来ないより出来たほうがいい、保育技術、特にピアノ面での期待が大きい、技術面ばかりに気を取られるより、保育者としての常識を身に付けてほしい」との声を多く伺うことがある。挨拶、元気な表情、掃除の仕方などがそれである。

実際どのくらいの割合で現場の保育者が求めているかを調べていくと、松尾ら（2018・2019・2020）の研究の中にアンケート形式で園長、管理職の調査結果が出ている。それによると、教育実習中の学生が体験した園務、作業は、保育室の清掃、トイレ掃除、園庭整備、配属以外の保育室と「掃除の時間」が圧倒的に多く、環境整備に時間を使っていることが明らかとなっている。幼稚園側からのコメントとして「掃除は子どもたちの環境のために不可欠である」とある。教育実習事前指導の中で、「教師の仕事は、子どもたちが帰った後にもたくさんあり、こと清掃には時間をかけ安全に子どもたちを迎える準備は大切な保育者の仕事である」と指導している。学生たちにとっては、どのように掃除をしてよいのかわからず、時間ばかりが過ぎていっているという事実もある。掃除に関しては「幼稚園での清掃、園庭整備などの必要性をしっかりと理解し手実習に臨むことで立派な学びに繋がる」という意見もあった。現代の学生達は、ホウキを使って掃く経験が少なく、雑巾を絞る際にも絞り方も様々であることが、実習事前指導の中でも見ることがある。学生だけに掃除を課するのではなく、一緒に教えながらコミュニケーションを取りながら、担任保育者と今日の保育について質問や子どもの姿を話し合ったり、笑いあったりする中で、学生は学びながら成長していくと思われる。園運営のために様々な作業がある保育現場では、保育準備、行事準備、壁面装飾制作など、実習に行かなければ学ぶ機会が少ない園務も多々ある。1つ1つ学んでいく中で、仕事の段取り、効率よく作業をする技を習得していくと思われる。保育現場での指導の中では、担当の教師や園長とのコミュニケーションがうまく取れずに、指導を受けている内容が全く入ってこ

ない学生もいる。それらの学生には、訪問指導の際に、1つ1つやって見て、これでいいか、確認を取りながら作業を進めていくことを指導し、分らないときは、保育者が行っている方法を観察するところから始めるように指導を行うことがある。

管理職側からは、身だしなみ、マナー（挨拶・箸の使い方）、生活技術（掃除の仕方、整理整頓）、保育者の基本として報告・連絡・相談、先輩の話を聞いて行動できるということが求められていると考えられる。

## VI. 資質能力の方向性

実習日誌を見ていく中で、感想・考察・気づき・反省と記述していく学生のノートを見ていくと、実習評価の高い学生の実習日誌を細かく見ていくと、PDCAサイクルにきちんと則って考察が書けている学生は、計画をきちんと行い、実際に保育をやってみる。その上でどこで行き詰ったか、あるいは何が足りなかったのかをきちんと考察を行い、次回の設定保育へ繋げていっている学生が実習先からの評価が高いということが言える。評価の低い学生の実習日誌を見ていくと、足りないのは、考察部分であることが分かった。実習日誌の中で「～だった」「～と思った」「～すればよかった」で日誌が止まっていることが多く見受けられた。考察力の差が学生自身の振り返りへと繋がっていることが分かってきた。日誌の意味するところを十分に活用されておらず、ゆえに指導教諭からも的確に指導が受けられていないことが多くあった。保育者としての観察力の違い、そして観察したことをきちんと文章化していく力がその学生に備わっているか否かが実習における評価の結果となって表れてきている。日誌の再提出を求められた学生の日誌を見ていくと、保育者の動きの気づきに「～だった」「～していた」との記述で終わっている。保育者がなぜそのように声をかけたのか、保育者が行った行動の意味を深く考える力が足りていないことが分かってきた。考察力を深めていくことが、保育者としての能力の向上に不可欠だと考える。生活技術面、保育者間のコミュニケーション江よくも必要となるが、目で見たこと、肌で感じたことを記録しきちんと考察力を十分に発揮して保育者の動きを見る力が伸びていく方向に違いが出てくると思

われる。

近年幼児教育に重大な関心を示して国際的な活動を行っている OECD においても、「子どもの学習と発達の上には品質基準が不可欠」<sup>7)</sup>として5大要素の1つとして「資格・訓練・労働条件の改善」を取り上げて、保育者の資格や初期教育などを重要視している。

保育者養成を様々な視点を重要視しながら今後指導が必要になってくると思われる。大学入学までの生活技術力、価値観、感覚としての人間関係を構築していく力を持って、その上に保育者としての常識を身に付けながら、観察力、指導力に磨きをかけていくことが出来るように、保育者養成校における課題が浮き彫りになってきた。資質能力は経験と体験から培われていき、保育者としての気づく力がその方向性を示していくと思われる。

現場からの声に耳を傾け、教育実習指導などの授業において、指導案、日誌の書き方、ねらい、ピアノ、制作の進め方などを講義・演習と通して指導を行っているが、保育者としての常識、観察力を活かすことが出来る保育に繋がるような指導が求められていることが言える。

### 引用文献

- 1) 文部科学省 (平成 27 年 12 月)  
中央教育審議会答申
- 2) 文部科学省 (平成 30 年 6 月)  
幼児教育の実践の質の向上に関する検討会
- 3) 文部科学省 (平成 14 年)

「幼稚園教員の資質向上について」

調査研究協力者会議 代表 無藤 隆

- 4) 松尾裕美 (2017) 模擬保育に学ぶ教育方法論 福岡女子短期大学研究紀要第 82 号
- 5) 津守真 (1989) 『子どもの世界をどう見るか』日本放送出版協会 pp184-187
- 6) 関口はつ江、太田光洋 (編著)「実践保育への保育学」同文書院 2003 p 153
- 7) “Starting Strong III : A Quality Toolbox for Early Childhood Education and Care” OECD Publishing 2012

### 参考文献

1. 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 文部科学省
2. 保育所保育指針 (平成 29 年告示) 厚生労働省
3. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (平成 29 年告示) 内閣府 文部科学省 厚生労働省
4. 幼児教育の実践の質向上に関する検討会資料 (平成 30 年) 幼稚園教員等に求められる資質・能力とその研修体系 神長 美津子
5. 文部科学省 (平成 27 年 12 月)  
中央教育審議会答申
6. 文部科学省保育教諭養成課程研究会資料 (平成 30 年)
7. 松尾智則、古賀和博、増田隆、永淵美香子、山崎篤、櫻井祐介、山下雅佳実 (2020) 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要第 52 号